真ネギま☆マギカＺ―外伝―

沈没船長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真ネギま☆マギカZ―外伝―

【Nコード】
N2377BA

【作者名】
沈没船長

【あらすじ】
本編の真ネギま☆マギカZの外伝的話。話しの間にあった小ネタやIFストーリーを適当に掲載！

模擬戦

紅き翼が完全なる世界に反撃を開始し、調査や協力者作りをしているとき。

そんな頭脳労働が苦手ｏｒ不得意な人物たち、ナギ・ラカン・マミの通称バグ戦隊は暇をもてあましていた。

この中に詠春も入る事があるが、彼とて次期日本呪術協会長なのだから多少の政治的駆け引きを心得ているので３人ほど暇ではない。

「暇だなぁ～」

「そうだなぁ～、マミ～いっちょ模擬戦でもしねぇか？」

「そうね～、連絡があるまでやることがないものね～」

最初は楽でいいやと思っていたがなかなか尻尾をつかめずにいる上に、原作よりも戦力が大幅に増えたせいで３人の仕事は減っていた。

雑魚や中堅なら機械獣と他のメンバーで余裕で潰せるが、３人が投入されるくらいの大物はそうそう引っかからない。

さすがに戦闘よりも休息が長いとやる事もなくなってくるようだ。

「ナギはどうするの？」

「昨日したから俺はいいや」

「ぬっふっふっふ、今日こそどっちが上か白黒つけようぜ」

「いつも引き分けですからね。いい加減決着をつけましょうか」

両者は少し距離を置き対峙しいつでも仕掛けられるように構えを取った。

「じゃあ、この石が落ちたら開始だぞ」

２人の戦いを見物するために少しはなれた丘に陣取ったナギが、開始の合図とするための石を投げた。

「ラカンーーー」

「光子力ゥ……」

そして、石が地面についたと同時に

「インパクト！（弱）」

「ビーム！（旧版&弱）」

互いの必殺技の低威力版を同時に放ち試合開始のゴングを高らかに鳴らした。

それから数時間後、調査と下部組織を潰してきたアルビレオたちが戻ってきた。

「ナギ、戻りましたよ。ラカンとマミは……、あそこですか」

「おお、戻ったかお前ら。」

「また、やってるのか……。日に日にここいらの地形が変わっていってるぞ」

「あんな所に池なんぞなかったしの」

戦っている人物たちが規格外すぎるため周辺の被害もまたとんでもないことになっていた。

『ラカン・適当に連打！』

『光子力マシンガンパンチ！』

「今度は谷が形成されそうじゃの」

「無茶苦茶すぎるぞ……」

2人の拳打がぶつかり合った衝撃波が地面を削り徐々に谷ができている。

『気弾・ラカン玉！』

『光子力居合い拳！』

「人の技パクるなよ…。それにそれはただ拳圧をとばしてるだけだぞ」

「それよりも流れ弾があちこちにクレーターを作ってますよ」

遠距離ではらちがあかないと離れた距離を再びつめて始めていた。そしていいかげんに決着をつけるためにそろって必殺技といえるものを繰り出そうとしていた。

『うらぁ！ラカン！必殺パンチ！！』

『はぁ！光子力！ダイナマイトパンチ！！』

技名からはとてもそうは見えないが、一流どころか下手な超一流でも巻き起こされる衝撃波に触れただけで倒せるだろう豪腕が途方もない速度でぶつかった。

「皆さん伏せてください！」

「姫様伏せて！！」

さっきまでの余波で地形が変わっていたのだ。それが先ほど繰り出していたものよりもさらに凄まじい一撃が引き起こすであろう衝撃波に備えてアリカ姫やタカミチ、クルトを大急ぎで地面に伏せさせて全周囲防御をおこなった次の瞬間。

ズドン！

至近距離に砲弾が落下したような音の後に、周辺に生えていた樹木の数本と岩といくつか吹き飛ばすほどの衝撃波が彼らがいる地点に到達した。

２発目が来るかとまだ防御を継続していたアル達がいつまでも来ない２発目を不思議がり防御を解きラカンたちがいる場所を見てみると。

大笑いしているラカンと膝を突きうつむいているマミがいた。

「どうやらラカンの勝利のようですが」

「勝利の理由がわからんな？マミもラカンも軽傷といっていい状態だぞ」

「直接聞けばいいじゃろう。向かってきておるしの」

勝負が決した理由がわからずにアルと詠春が不思議がっている間に立ち上がったマミとひとしきり笑ったラカンが向かってきていた。

「おつかれ！それで勝因はなんだったんだラカン？」

「ああ、こいつ同じ技名を２回言ったんだよ」

「く、少しこだわりすぎたわね」

「どんな勝負をしてるんだお前らは！」

周辺の被害に比べてあまりにも子供じみた勝利条件に思わず詠春が突っ込んだが。

「何いってんだ、技名は重要だろうが」

「そうよ。それに詠春だって叫んでいるじゃない」

「ぐ……、しかし私のは神鳴流としての」

「「おなじだろ（でしょ）」」

が、お前も同じだと逆につっこまれてしまい撃沈された。

「おもしろそうだな！次は俺としようぜ、もちろん同じルールでな！！」

次は俺だ！と意気込んだナギだったが2人のほうは

「いや、ナギお前じゃ無理だ」

「何でだよ！」

「だってあなたって言うか魔法使いは」

「「技名固定じゃない（だろうが）」」

「しまったーーーーー！！」

精霊の命令を出すために魔法の詠唱や魔法名は変更ができず。身体強化だけでは2人には太刀打ちできず、無詠唱ではそもそも勝負にもならない。

自身の致命的な弱点に気がついたナギが膝から崩れ落ちる姿を横目に。

「アホじゃろ」

「アホですね」

今日も紅き翼は平常運転のようだ。

模擬戦（後書き）

こんな感じの話を思いついたら載せていきます！
あまりシリアスや真面目な話を期待しないように！

神にも悪魔にもなれる力

これは魔法世界のとある地方で起こったお話。

そこはのどかなのどかなゆっくりと流れる時間が特産とも言われている片田舎で目撃された恐怖の光景。

この片田舎は少数の住民が暮らすだけの場所だった。数日前に何人かの人物が少しはなれた湖にある貴族だかのお城を聞きに着たくらいでそれ以降もいつもどうりの日常が過ぎていくはずだった……。

それは突然起こった。日も暮れて皆が明日に備えて寝ようかとしたときに西で―貴族の城がある方角―で先ほど沈んだはずの太陽の光がきらめいた。

何事かと慌てて周辺が見渡せるひときわ高い木に若者がのぼり、魔法具によって捕らえた映像は見えいた者全てに恐怖を植えつけた。

天高く立ち上る巨大な……巨大なきのこ雲の姿を………。

事の起こりはある一言から始まった。

「お前の銃召喚ってどれくらいが限界なんだ？」

仲間の不思議な魔法にそんな疑問を抱いたことが全ての始まりだった。

「いきなりね……。でも、自分でも何処までいけるか把握してなかったわね」

「じゃあ、試してみたらいいんじゃねぇか？あいつらの話しだともう少しかかるみたいだしよ」

「そうね」

雑魚つぶしが粗方終わり、敵方の幹部や大物協力者とやり合う機会も増えてきて以前より忙しくなったが待機中が暇なことは変わってなかった。

使用者もまた自身の魔法の限界を把握してなかったことに気がつき暇つぶし兼限界を見極めるために自身の内へと意識を向けた。

それから暫くして彼らの前には途方もなく巨大なつつが出現していた。

「ふぅ、大きさはここが限界かなぁ」

「でけぇーなぁ！どれくらいあんだ？」

「大砲のほうは１００ｃｍ７５口径で材質は超合金ニューＺ、砲弾

は超合金ニューZを弾殻にして炸薬は光子力爆弾よ」
「さっぱりわからねぇがとにかくすげぇんだな！」
「ええ、それは保障するわ！これ以上は私がイメージできないから無理ね」
「さっそく試し撃ちしようぜ！的は……あの山がいいんじゃないか？」
「だな、程よく離れていてデカイからちょうど良さそうだな」
「じゃあ、さっそく…」
３人が威力を見るために放とうとしたときに。
「何をやってるんですかあなた達は……。敵の拠点が判明しました。今から攻略に移るので着てください」
調査が終わり３人を呼びに来たアルが呆れた声でそういった。
「なんだよ、今いい所だってのに」
「それは帰ってきてからでも」
「いや、ナギ。これはちょうどよかったかも知れんぞ」
「何でだよ？」
「これを敵の拠点にぶっ放せばいいじゃねぇか。そうすれば一石二

鳥だぜ！」

「確かにそうだな！よし行くぞ野郎ども！！」

「ちょっとそんなに急かさないでよ」

後に彼は言う

「あそこで無人の禿山に撃たせておけば被害は多少は少なくなったかもしれない」

と。

集結した赤き翼の面々は湖に立つ敵の拠点が見える丘にいた。

そこでアルが全員にあの敵の拠点がどうのような役割か、補給はどうなってるか、戦力はどうかなど言ったが。

「マミさっさとぶっ放そうぜ！」

リーダーのこの一言で作戦会議は終了してマミが召喚を開始した。

使用者であるマミとバグ２人はまじかで見るために移動しなかったが、呼び出されたものを見て他のメンバーは一目散に距離をとった。

「あれを見る前は大丈夫なのかと思ったが、今はこっちが大丈夫なのかと心配になってきたぞ……」

「全くですね。タカミチ君とクルト君は絶対に結界から外には出ないように」

「「は、はい……」」

メンバー全員がなんともいえない目で見つめているのをよそについに発射体制が整った。

「じゃあ、いくわよ！」

「おう！派手に頼むぜ！！」

「さんざんこっちをおちょくってくれた相手だやっちまえ！」

「ティロ！フィナーーーレ！！」

マミの発射の合図と同時に３人は仲良く宙を舞った。

それを離れたところから見ていたメンバーは一部始終を見ていた。

「おい、発射の衝撃波であいつら吹っ飛んでいったぞ……」

「彼らなら大丈夫でしょうけれど、まさかこれほどとは……」

あまりの事態に呆れているとマミからおおよその着弾までの時間

を聞いて時計で測っていた詠春が。

「そろそろ着弾するぞ！」

立ち上がりかけた体を再び伏せて先ほどの光景もあって閃光防御も追加した障壁を張った次の瞬間。

敵拠点で何かが衝突したと思しき土煙が上がり、暫くして強烈な閃光、途方もない衝撃波と熱波が彼らがいた地点まで押し寄せてきた。

閃光防御をしていなければおそらく今頃目をやられていただろう。それにここが無人地帯でよかったと思い拠点に目を向けてみたが。

「……おい。拠点は何処に行った？」

「何処にもありません。あの煙の中には穴しかとらえられませんよ」

「無茶苦茶じゃな……」

砲弾が命中した敵拠点は跡形もなく消え去っていて爆発が引き起こした波によって周辺もかなりの被害が発生していた。

それから気がついた３人に説教の後、先ほどのものは永久封印するようにと通達してこの事件は幕を閉じたが。

周辺住人の心に恐怖を植えつけ、マミに改めて自身が貰った力がどのようなものかを思い知らした。

神にも悪魔にもなれる力。さらには神を超え悪魔を殺すことさえ出来てしまう力。それがどんなものかこの事件は強烈にマミに知らしめた。

神にも悪魔にもなれる力（後書き）

ほのぼの失敗談だったはずが、なぜか若干シリアスチックな終わり方に……。

この外伝は何かネタが思いついたら書いていきます。

とりあえずもう１本はネタがあるかな？

図書館島を攻略せよ！（前編）

期末試験も終わり、学生待望の春休みのとある日。

期末試験で真っ白に燃えつきかけたバカレンジャーとその友人達が寮の大浴場での話題から始まる大冒険。

「試験も終わってやっとお休みね〜」

「そうアルナ〜」

「赤点も回避できて、地獄の補習も何とか受けなくてすんだね」

「そうでござるな〜。」

試験前に言い渡された、赤点時や試験勉強をまじめにしていなかった場合の春休み中の補習を何とか避けることが出来。彼女たちは皆まったりとお風呂で戦いの疲れをいやしていた。

「しかし、気を抜けば次回に補習がまっていますよ」

「う、そうなのよね〜」

「今回は何とかなったけれど、次の中間はどうかなぁ」

「何かいい方法はないアルか」

「ん～」

普通ならば普段から勉強をしろという場面だが、彼女達はそれぞれに日頃別のことで忙しかったり、いろいろと……陽気なので忘れがちなため何か必勝法はないかと頭をひねった。

補習地獄こそ逃れられたが、テスト勉強の日々はぶっちゃけ補習地獄とそう変わらないんじゃね？と彼女達とて気がつくくらい過酷だったのだ。

（アイツなら魔法使いなんだから頭をよくする魔法とか知ってるかもしれないわね。）

明日菜は自身が知っているそんな裏技の持ち主に聞いてみようかと思ったが。

（……やっぱり止めたほうがいいわね。記憶を消すとかいって服を消すような奴なんだし。脱ぎ魔にでもされちゃかなわないわ）

最初のイメージか日頃の行いのせいか、ネギが使う魔法に対しての評価が底辺な明日菜はさっさとその案を却下した。

「そうですね。確証はないですが１つ心当たりが」

「本当アルか！」

「皆さん図書館島は知っていますよね？」

「う、うん。湖にあるでっかい建物よね？確か奥の方は許可制だっけ？」

「はいその図書館島です。私たちの部活の図書館探検部の先輩から聞いた話なんですが、図書館島の深部には魔法の本が眠っているとか」

「それならうちも聞いた事あるけど、ほんとなん？」

「だよねぇ。図書館島がすごい事は知っているけれど魔法の本って……」

「そうだよぉ。それに私たちじゃ奥になんて進めないよ」

バカブラックでありバカレンジャーリーダの、それでいて実は頭がよかったりする夕映からの話しに同じ部活の木乃香、ハルナ、のどかは聞いた事はあるが眉唾な話しなのと現実問題としてそんなところにいけるわけないと否定の声をあげたが。

「私も最初はそう思ったのですが、話を聞いてみると冬休みに奇襲的に大規模探査をしたときに、ある一隊が深部の隠し通路からまるで神殿のような部屋についたみたいです」

「え？でもそれって気のせいか何かだったんじゃ？」

「確かに所持していた記録媒体にはそんな場所は記録されていなかったんですが。納得がいかなかったその隊のメンバーが大学の工学部にいるOBの方に解析を依頼したところ」

「依頼したところ？」

「“確かにそのような場所は記録されていないが、この媒体に何ら

かの改ざん処置が行われたらしい”という結果が返ってきたのです」

「えええええ！それ本当！初耳だけど！」

「はい、ある伝で聞いた事ではありますが、本当だと。しかし、そこまでして隠したい何かがあるということで部外秘にしているそうです」

「むむむ、確かにそれだともしかしたら？」

「魔法の本かはわからへんけど、何かあるかもしれんな」

「ででも、そんなところだと私たちじゃよけいに到達するなんて無理だよ」

魔法の本かはともかく何かありそうなことに木乃香とハルナは賛成に傾き、しかしのどかはやはり大学生達がしっかりと訓練をつみ大人数で挑んでも偶然到達できた場所にはいけないと反対し続けたが。

「いえのどか、我々というよりバカレンジャーの皆さんの協力があれば不可能ではないです」

「え、でも……」

「確かにいくら訓練を受けても私たちや普通の学生であるほかの部員では多くのサポート要員と“彼女たち”を止める部隊が必要になってしまいます」

「でも、麻帆良四天王のうち2人と抜群の運動神経を持っている明

日菜とまき絵ならサポート要員はいらないしから少人数でいける」
「少人数なら“彼女たち”に見つかる確率も下がるかもって分けやな」
夕映の可能とする根拠にハルナと木乃香も言葉をつなぎのどかを説得しだした。
「なので後は案内人さえいれば深部に到達する事も不可能ではないかと」
「でも……。あの人たちがそう簡単に行かせてくれる？」
「のどかの心配もわかります。それにこれは先輩方に対する裏切りになるかもしれません。しかし、図書館探検部部員として幻の場所の解明ができるならいってはみたいと思いませんか！？」
確かにバカレンジャーの面々なら図書館島の罠ぐらいでは大丈夫だろうが、やはり彼女たちのことが気になったのどかではあったが、その彼女達と当たるであろう当人たちから。
「彼女とはやはり？」
「ええ、彼女たちです」
「それなら魔法の本はあまり興味はないでござるが、ぜひいってみないでござるな」
「？誰アルか？」

「クーも知ってるあの人たちでござるよ」

「おお！それなら私もいくアル！今度こそ勝ってみせるアルよ！！」

「のどか大丈夫です。必ず帰ってきます」

当人たちがやる気十分な姿を見てついにのどかも

「わかった、でも気をつけてね」

「はい」

「じゃあ、私達は地上で連絡と監視かな」

「うちは潜れるぎりぎりのところで、通ったか連絡を入れるわ」

「どれくらいかかるか、わからないから食糧もいるかな？」

「腕が鳴るアルナ！」

「ニンニン♪」

と、早くも役割分担や持っていく物資の相談を始める探検部と戦いのときを待ち望む四天王２人とちがいわりと一般人な残り２人は。

「え〜と、どういうことか説明して欲しいんだけれど」

「うんうん……」

事態が飲み込めず置いてけぼりだった。

図書館島を攻略せよ！（後編）

　そして作戦決行当日。
　メンバーはあの時の8人＋ネギが今回の探検隊のメンバーになった。ネギの参戦に大丈夫かと声も上がったが、明日菜がこいつなら大丈夫と言ったこととそれなりに動けるようだとわかったので参加が決定した。
（ちゃんと私たちを魔法で守りなさいよ）
（確かにちょっと興味はありますけど、そんなに危険なんですか？）
　つれてこられたネギはただの図書館で魔法を使う場面なんてあるのか？と疑問に思っているが。
「じゃあ、私とのどかはここで連絡係をするね」
「気をつけてね」
　2人を地上に残し裏の部員のみが知っている出入り口から地下三階へと向かった。
「この図書館島は……」
　つくまでに夕映と木乃香による図書館島の概要と図書館探検部の発足理由などの説明が入るのだが長いので割愛。
　到着した地下3階の地上部分とは違った風景や珍しい本を発見し

て手に取ろうとしたネギに罠が発動したりとひとしきり騒いだ後、木乃香を監視要員として残して探検隊の面々はさらに地下へともぐっていった。

「夕映ちゃんどれくらい歩くの？」

「そうですね。内緒で部室から持ってきた地図によると問題の部屋を発見した隊は地下１１階で隠し通路を発見したみたいですから」

と持ってきた地図を広げ指で目的地の大体の場所を示した後

「今いるのはここで、地下１１階まで降りるわけですから何も問題が発生しなければ往復で４時間くらいでしょうか」

「今は６時頃だから帰ったらちょっと遅くなったって感じでかな？」

「休みですから寮監にするいいわけもいくらでも作れます。では出発です！」

「「「「おーーーー！」」」」

一方その頃地上の２人はというと。

「のどかそっちはどう？」

『ううん。まだ見てないよ』

出入り口近くに無線の中継器を設置した後に、図書館島から麻帆良市内に移動して広域指導員が通らないか見張っていた。

「少人数だと警報装置か何かに引っかかりにくいのかな？」

『でも、先輩たちもそれを疑って少人数でバラバラで潜ったけれど、出動時間はあまり変わらなかったって言ってたよ』

「やっぱり夕映の読みどおり大人数だとすぐ発見されるからかぁ」

と話し合っていると

『ハルナ！２人が図書館島に向かってるのを確認したよ！』

「こっちも残りの一人が向かってるのを確認した。木乃香に連絡を入れよう」

『う、うん』

「やっぱりというか彼女達かぁ。高畑先生あたりだとまだよかったんだけどな」

来るだろうとは思っていたが来て欲しくない人物たちがきたことにハルナは一人愚痴をつぶやいた。

「了解、夕映たちに知らせるわ」

『うん、お願い！』

一方、地上班から連絡を受けた木乃香は探索隊に敵接近の報を入れるために連絡を取っていると。

タタン！ッタ！ザザ！

上の方から何かが迫ってくる音が聞こえてきた。

ダッ！ガッ！

それもその音は急速に近づいてきていた。

『木乃香どうしたですか？』

「彼女達がきたえ！それも今もどんどん地下に降りてるみたいや！」

『わかりました、あなたはそこで引き続き監視を…』

しかし夕映の言葉が完全に言い終わる前に木乃香の目の前を３人の人物が本棚を足場にほぼ落下してるといってもいい速さで過ぎていった。

『どうしたんですか木乃香？』

「今前を過ぎていったえ……」

『な！わかりました少し作戦を変更した方がいいですね』

「気をつけてな」

酷い事にはならないだろうが一抹の不安を抱きながら木乃香は通信をきった。

「まずいですね。予想より彼女達の速度が速いようです」

「おお！ついに来たアルか！」

「このイベントに参加したかいがあったでござるな」

予想以上の速度に頭を悩ませるリーダーをよそに武闘派２人組みはさらにテンションをあげていた。

「だから彼女達って誰よ！」

「いい加減教えてよ～」

「？？」

そしてその彼女達に全く心当たりがない一般人？３人はいい加減教えろと声をあげた。ネギにいたっては昨日無理やりに予定を空けさせられて連れて来られたので、よけいに分けがわからないといった表情だ。

「時間がないので簡潔に言いますとガミア先生が私たちを捕縛するためにこちらに向かってきているんです」

「「なるほど～………ええええええ！」」

「ガミア先生？」

彼女の怖さは嫌というほど知ってる二人は悲鳴を上げ、接点のないネギは聞いた事のない名前にいまいち深刻さが理解できていなかった。

「ネギ先生は広域指導員については？」

「知っていますよ」

「彼女達はその広域指導員の仲でも特に恐れられている人たちです。そしてこの図書館島の地下は許可がある人しか立ち入りが許されてないので、現在彼女達は私たちを捕まえるためにこちらに向かっている最中です」

緊急事態なため足を止めずにかつ早口でおおよその状況をネギに伝え、それを聞いたネギは。

「ええ！これ禁止されたことなんですか！」

「はい。それより彼女達を足止めしないといけません。目的地まであと少しです」

「ならば拙者とクーが残ろう。あと、向こうは3人ならば数あわせとして、明日菜殿かまき絵殿に残って欲しいでござるな」

「ふふふ、この前のリベンジアル！」

「あ、明日菜残りなよ！私より腕っ節いるんだから！！」

「ま、まき絵ちゃんも私よりすばやいじゃない！」

「そうですね。まき絵さんは移動するときにとても助かるので私と一緒に奥へ向かいましょう。明日菜さんは彼女達の足止めをそれと、ネギ先生ももしかしたら何かの役に立つかもしれないので足止めおねがいします」

「ちょ！夕映ちゃん！」

「やったぁ！」

「何かの役にあって……」

レッドとピンクはそれぞれの運命に一喜一憂し、ネギはあんまりな言い方に若干へこんだ。

「ネギ先生の同伴による図書館見学とか何かいいわけを言っていただけるとありがたいです。それで止まるとは思えないのですがもしもという事もあるので」

「……わかりました」

「それとまき絵さん、どの道最後は彼女達に捕縛されるのでたどる道は同じですよ」

「え゛」

それぞれの役割分担を確認した後、まき絵＆夕映組はさらに奥に残りの武闘派＋２は足止めのためほどよい広さの場所に陣取った。

それから数分後、広場といえる場所で待ち構えていた４人の前についにガミア３姉妹が現れた。

「うう、本当にガミア先生だ……」

「にんにん♪」

「楽しみアルナ！」

「ま、まずは話し合いましょうよ……」

そう言い一歩前に出たネギはガミアたちに向かい。

「え～とガミア先生ですか？僕は教育実習生のネギ・スプリングフィールドです。この図書館島は許可制みたいですけれど、僕がついているので心配は要らないですからどうかお帰り願えないでしょうか？」

「ネギ・スプリングフィールド。」

「お前は学園長から許可をもらっているか？」

「え？いえ……」

「ならば貴様に同伴者としての資格は無い」

「「「よって貴様を含めた４人を侵入者と判断して排除する」」」

「えええ！」

「いつもの事だけどほんとに容赦ないわね……」

「それが彼女達が怖がられている要因でござるからな」

「もとより期待はしてなかったアルよ！ハァ！！」

「む！」

交渉決裂と同時に古菲が一人に飛び掛りそのまま一段したの広場に。

同じく楓も煙幕と分身を使いもう一人を引き離した。

「ああ！もう！ネギいくわよ！！」

「え！明日菜さん！！」

明日菜＆ネギ組みもまた戦闘に入った。

「ふん！」

「きゃあ！」

「ええ！わぷ！」

が、明日菜が髪に捕らえられてそのままネギにぶつけられ、この2人は一瞬で退場させられてしまった。

魔法などを駆使すれば結果は違っただろうが、まだパートナーになってない2人とガミアを一般人と思っていて魔法を使えないネギではこんなものだろう。

（やはりあの2人に彼女の相手は酷過ぎたでござるか）

予想していたこととはいえ一瞬で2人を破ったガミアに驚きながら楓は次のことを考えていた。

（問題は彼女がどう出るか……クーも2人同時は辛いでござろうし。夕映殿とまき絵殿ではあの2人と同じ結果になってしまうでござるな）

そしてそれは足止めという任務が失敗したことを意味し、今回の探索の失敗でもある。

（何とかこっちに注意を……、こちらに来る？それに前の一人も未だに動きが）

そう思案している間にも2人目も目の前に駆け上がってきていた。

「拙者一人に2人なんで豪華でござるな」

「貴様はこの中では一番厄介そうだからな」

「我ら2人で当たる事にしたのだ」

「それは光栄でござるな。いくでござる！」

上段の広場で激しい戦いの幕が切って落とされた。

それから十数分後、まずは下段の古菲のほうは。

「はぁ、はぁ、本当にガミア先生は強いアルナ」

「貴様では我々には勝てんおとなしく投降しろ」

疲労が溜まってきている古菲とは違い開始からほとんど変わらぬ姿と姿勢で高みから見下ろすようにガミアは再度降伏を告げた。

(何発かは入れてるアルが。手ごたえがあまりないアルね…。打点をずらされたか、それにあの髪も厄介ある。なんて流派あるか？髪を自在に操るなんて聞いた事ないアル)

古菲も一般人というくくりでは最強かもしれないが、相手は一般人ではなくましてー般人を狩るために設計された殺人アンドロイドたるガミアQではあまりにも分が悪すぎた。

古菲の攻撃に対応できるだけの格闘スキルをもち身体能力も上、さらには変化自在の髪により思わぬ場所からの奇襲や姿勢変更に古菲のほうが対応できないことも何度かあった。

（まずいアルね……。ここで私が負ければ他のみんなに負担が）

すでに2人退場してるとは露知らずに、今後どうするかと頭を悩ませたが。

「すきありだ」

「しま！」

相手はそんな隙を見逃してくれるわけもなく、一気に接近されたところに通常の格闘の合間に混ざった髪による一撃を受けて彼女もまた脱落してしまった。

（やっぱり強いアルナ……。私ももっと修行をしないと）

しかし負けた彼女の顔は挑むべき強者の存在をより強く捉えたことで晴れやかであった。

（クーも敗れたか？く、そうなるとまずいでござるな……）

ガミア2人に楓は善戦どころか若干押して入るが3人目が加われば一気に形勢は逆転してしまうだろう。

分身の術やクナイの投擲で数の不利を補うどころか逆に有効打を与えているが、気弾や大手裏剣など周りの本を傷つける技が使えずにいるため決定打がいささか不足していた。

（低い威力ではあの髪に弾かれてしまうでござるし、どうしたものか…）

古菲のときも後ろでポーにーテールにしていた髪は、彼女に対しては全力戦闘の証なのか解き若干ツインテール気味にまとまってはいるが淡く輝き触手のようにうごめいていた。

（鞭よりしなやかで刀より鋭い。鋼糸がそんな感じと聞いた事はあるでござるが、ここまで戦いにくいとは）

あるときは逸らし、弾き時には切断する彼女の髪を突破する手立てが今の楓には思いつかなかった。

（しかし、勝つ事はできなくても時間を稼ぐ事はできるでござる。夕映殿が探索を完了するまでなら十分……）

より苦しくなる戦況に楓はガミアに勝利することから少しでも長くここに引き止めるよう作戦を変更した。

予想外の増援がいる事を知らずに……。

楓たちが時間を稼いでいる間に夕映達は無事に隠し通路を発見して目的地目前まで迫っていた。

「ここを抜ければ目的に本があるであろう神殿に着くはずです！」

「早く抜けよう〜、服がボロボロだよう」

ついに見る事ができる伝説？の場所に興奮する夕映と違ってまき絵はさんざん変な場所を通らされてうんざりしていた。

そしてついにあけた形跡がある部分を発見して、扉となっている石を押し上げた先には

「とうとう着きました……。ここが魔法の本の安置室です」

「すごーい！弟のゲームで見たことあるこんな感じのところ！！」

到達した部屋の予想以上の荘厳な雰囲気に2人して騒いでいると。

「よく来たねと言いたいところだが、2人とも校則違反だよ。」

そこには2人の担任である弓がたたずんでいた。

「「え？弓先生！？」」

「他の人たちも保護したから君たちも戻るよ」

「え！いや何故弓先生がここに！？」

自分たちがやっとの思いで到達した場所に弓が平然と立っていることに夕映が質問したが。

「何故ってここは学園の施設なんだ、私たち教師が入れて当然でないか。さすがに危険な事と観覧禁止の書物なども収めてあるから生

徒にはなかなか許可は下りないけれどね」
帰ってきた正論過ぎる言葉に反論が思い浮かばず、ここに彼女達の図書館探索は幕を閉じた。

「む～、まさか弓先生が出てくると思ってもみなかった出ござるなぁ」
「突破しようとしたのですが意外と手ごわくて無理でした」
「まさかあんなに動けるなんて思わないよ～」
「でも何処から入ったんだろう？裏口は見張っていたけれど夕映たちが戻ってきたエレベータには乗ってなかったはずだけど」
「次は夏休みにもぐるある！リベンジアル！」
「私はもういいわよ……」
「僕もです……」
「私も2度目はいいかな……」
探検部のような情熱や武闘派2人のようなガミア先生に対して挑戦する気がない3人は帰ってからのお説教が聞いたのかあまり乗り

気ではなかった。

これで彼女達の図書館探検は終わった。

魔法の本こそ見つけることはできなかったが、確認が取れていなかった幻の部屋を発見できた事は探検部にとっては成功といってもよかった。

それに苦難を共にした事で彼女達の絆も前より深くなったかも？

図書館島を攻略せよ！（後編）（後書き）

戦闘の結果は現時点ではこんなものかなと。

基本素人のネギ＆明日菜組み、一般人としての最強のクー、で学園祭時の様子を見るにかなりできる楓という事でこうなりました。

外伝はここでいったんお休みして、今度こそ本編を書くぞ……

思いつきネタ集？（前書き）

今回は思いつきで書いたものなので内容には期待しないように！

思いつきネタ集？

もしも、マミの体に付与されたのがほかの永井豪作品のキャラだったら！

その１

「チェーンジ！マジックガールーール！！」

マミが両手の拳を打ちつけると、その体は光り輝き姿を変え始めた。

そして光を破って出てきたマミは衣装を変えその両の目にはどこまでも悪を憎む炎が宿っていた。

なんやかんやでピンチに

「く！やるわねミケーネ帝国！！」

ミケーネ帝国が繰り出してきた鬼神兵に苦戦するマミは、相棒でありサポート役として遣わされた白き相棒に

「キュウベイ！ジーグパーツを！！」

「了解だマミ！ジーグパーツシュートー！」

キュゥべえが何処からともなく射出したパーツを確認したマミは体を丸めるとその姿は巨大な

「こらーーー！」

なんだいいいところなのに？

「いくらなんでもこれはまずいでしょう……」

でも、逆マミってるかんじで面白（ｒｙ

「それが問題なのよ！！」

銅鑼の力とか妖術とかも付加できて面白そうなんだけどなぁ～。

お供三人もつけるから（ｒｙ

「マミブリーカー！死ねぇ！！」

その２！

最終決戦にて追い詰められるマミ……

意を決した彼女は仲間のために少しでも敵に深手を負わすために、自身の力の源であり彼らをかつて追いやった力を発する心臓を己の体から（ｒｙ

「今度はゲッター？」

うむ、黄色でいろんな世界で死んでいるつながりで……

「別の意味で問題が発生しそうね……。それとその作者は石川先生

でしょ」

敵がエンペラー率いるゲッター軍団にチェンジかもね。

永井先生も原作者として上がっているぞ。

その（ｒｙ

「もういいから……。どうせならキューティーハニーとか良いのがあるんだし」

けっこう仮面とかは

「その内マミさんファンから殺されるわよ」

あと、ハニーもけっこうチート気味な気もするけどね。

「空中元素固定装置はね……。って、デビルマンは出さないのね？マミさんの体じゃなくなれけれど。でも、シレーヌとかは……」

アレは彼用だから。

「彼？……まさか！」

そのまさかさ！

番外？

悪魔先生ネギ魔！

魔法世界で生徒を守るために闇の魔法に手を出したネギ。

しかし、その代償はあまりに高く、彼は悪魔へとなってしまった。

しかし！彼の心は未だ心優しき少年だった！！

そう、ここに悪魔の体を持ち人間の心を持った者、デビルマンが誕生したのだ！！

「わ～、微妙に洒落にならないわね……」

姿はＴＶ版の海パン一丁のあれで顔だけネギ君だ！

「いいんちょうが、やばいことになりそうね……」

ついでに劇場版　悪魔先生ネギ魔　～魔神皇帝の復活！～

いつか公開？

「どんな嘘予告よ！それと魔神皇帝ってまさか……」

出番が少ない陛下のｉｆストーリーもその内作ってみたいね。

思いつきネタ集？（後書き）

ふと思いついついて書いてみた！

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2377ba/

真ネギま☆マギカZ－外伝－

2012年1月11日01時49分発行